

魯 郭翰琳
LU Guohanlin



距離

銅、和紙、花



距離

コロナが始まってから約3年が経つ、一番つらかったのはほとんど外に出られなかった時期で、その間は窓から外の世界や景色を体験していった。窓は、その間の私の生活との距離感だった。

私の出身地である中国雲南省は非常に温暖な気候のため、雲南人は昔から花を食べる習慣がある。母が庭師だったこともあり、子供の頃から花の手入れを手伝っていたこともあり、花に親近感があり、私にとって花は生活、花のあるところは風景である。

本物の花を紙パルプで包んで花紙を作り、その花紙に以前撮った風景写真をプリントした。写真は記憶を残すものなので、風景の記憶で花を包んでみた。銅板で作った枠に花紙と窓を組み合わせ、コロナ時代の距離感を表現したものである、それは私にとってはすでに遠い存在になっている。

花紙や風景のある窓は目に見え、触れることができるが、三年前のコロナのように、夢のように幻想的で、距離感に満ちている。紙と窓が離れているのは、その間も外の風景の中に立って窓を眺めていたいという気持ちも込めていて、それもまた距離感があって、でも好きな距離感だった。